

【巻頭言】

『日本のフィンテックの「これから」を考える』

「フィンテック (FinTech) 」とは、「金融 (Finance) 」と「技術 (Technology) 」を組み合わせた造語である。コンピュータの性能向上とスマートフォンの普及の上に、ビッグデータの集積、さらにはAI (人工知能) やブロックチェーンといった新たな技術の発展があり、ITが全てのモノやサービスと結びつくIoT (Internet of Things) に象徴される第4次産業革命の波が来ていると言われている。この波は、あらゆる産業分野に広がっているが、われわれの生活に密接な関係を持つ金融分野にも革新的な波及効果をもたらしている。このようなITの最新技術を駆使した新たな金融サービスがフィンテックの本質である。

フィンテックは、リーマンショック後のアメリカにおいてベンチャー企業を中心に勃興し、ミレニアル世代と呼ばれる若いユーザーに積極的に受け入れられた。わが国にも2015年以降、広く紹介されて、その一部はすでに日本版フィンテックとして金融業界に根付いている。もっとも、これまでは揺籃期あるいは新たなコンセプトの実証期間であったと思われる、仮想通貨が昨年後半から急速に世間の耳目を集めたように、ビジネスとしてのフィンテックが日本で本格的に始動するのは今年が元年になるのではないかと思われる。そして、この本格稼働により、日本の金融システムは大きな変革 (イノベーション) を迎える可能性がある。

本冊子は、このようなタイミングにおいて、まずフィンテックの現状を概観し、さらに特徴的ないくつかの分野の最新の動向を追った上で、フィンテックが我が国の金融業さらには経済の発展にどのようなインパクトを与えるかを考察し、その将来像を予測するものである。

以下、本冊子の構成について紹介する。

第1章は、「進展するフィンテックの全体像」として、フィンテックとは何か、今何が起きているかを概観するものである。短時間でフィンテックを理解できる入門編でもある。

第2章「ブロックチェーン・仮想通貨市場の現状と将来像」と第3章「仮想通貨取引所に対する行政規制」は、近年フィンテックの一分野としては最も話題になることが多い仮想通貨やICOについて、その現状と課題を技術面・経済面のみならず法律的な側面も含めてわかりやすく解説したものである。

第4章「フィンテックと地方創生」では、大都市圏の若者向けサービス向上だけでなく、地域資源を活用した観光振興など地域経済の活性化にもフィンテックは貢献するという事例を紹介する。また、第5章「不動産テックと不動産ビジネス」は、ITの発達やIoTの展開が、金融のみならず不動産取引にも大きく波及している姿を具体的に解き明かす。

第6章「中国におけるキャッシュレス社会の現状と展望」は、日本に比してキャッシュレス化が格段に進む中国の状況を現地からレポートしたものである。さらに、第7章「フィンテックの発展が切り開くキャッシュマネジメントの未来像」は、フィンテックがCMSやTMSといった個別の金融サービス分野にも大きなインパクトがあることを検証する。

第8章「フィンテック雑考 ―金融とITの融合の将来像―」では、フィンテックの進展がわが国の金融業界に将来どのような影響をもたらすのか、その方向性を探る。

本冊子が、読者のフィンテックに関する理解を深め、我が国経済を活性化する方向で今後フィンテックが普及発展する一助となれば幸いである。

株式会社価値総合研究所 代表取締役社長 山本 貴之